

五時庵隨筆

石川理紀之助著

五時庵随筆目録

三十一年九月農況	1
浮遊	1
秋田浦の神	1
こらふ	1
男鹿街道の三十三番の碑	1
北野天満宮の古池	2
茶屋の老父の呪語	2
岩倉毘沙門の施餓鬼	2
岩倉左近の館	4
元岩倉の地 同寺の古墓	4
新嘗祭 豊明節会 新嘗祭 大嘗祭	5
石灰華	5
黒曜石	5
岩倉祖霊をまつることば	5
増川山の杉種	6
昔桂樹の多きこと	6
川村永之助氏への悔状	7
佐藤信学氏のこと	7

牛丸重令氏	8
焼面	8
舟橋の古茶釜	8
靈飯（にたまめし）	8
あまいけ（雨池）	8
沢見	8
ひるね	8
才ノ浜	9
行塚	9
小泉の産土神	9
小泉の石器	10
あいの橋	10
千人隠	10
石田梅巖	10
別分のはたらき	10
中古までの大工	10
何めり	10
乱橋	11
机の事	11
瀬沢の槻	11

餓死	………	11
教の言葉	………	12
石敢当	………	12
秋田感恩講	………	12
うなづく	………	12
田螺を囲うこと	………	13
一里塚	………	13

五時庵隨筆

秋田 石川理紀之助

明治三十一年九月二日

農況

早稲、中稲既に穂垂れたり。昨日の二百十日も風なし。昨日迄十日斗快晴九十度以上にて、近年の残暑なり。沢田等の晚稲は悪風あればまた心遣也。上作也。砂畑の南瓜既に収穫、女瓜半ば過たり。瓢は少し、粟中作也。八日稗當時刈取たり。米価豊作の為下落にて三斗入四円以内となり、昨年の不作の人氣も大に引直りたり。芋果も中作なり、小粒なり。梨豊作也。李同上。

浮蟬

三日の明方旭川を渡る。川下五丁目橋辺より通町辺（其前後は見ず）まで数万の蛾川上を飛ぶ。長さ一寸余、羽細長く全身白色にして形長し。手に採れば忽ち卵を産む。其さま昨夕頃化したるものゝ如く弱きもの也。

明方に川上に登り五六時の頃水上に落て下りたりといふ。松原行益いう、これは浮蟬という虫にて俗に浮蟬の一時という、忽ち死するもの也。六七年前にも発生して市中に落て地上白くなりしことありしという。

秋田の浦の神

秋田の浦の神に誓てという東夷のいわれたるは何処なりや、諸氏いろいろの説あり。中に寺内の古人鎌田正家が北の浦の事なりといわれたり。こはあきたの浦をきたの浦と唱えたるならんといわれしは同意なりと真崎勇助氏今日の咄也。

こらふ

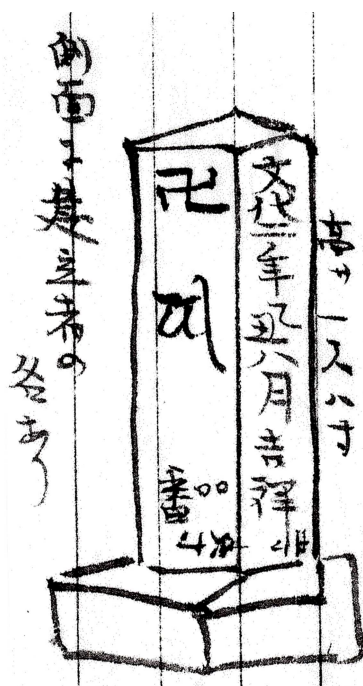
秋田に草を刈り束ねるをこらふという。これは箇といふ用語なるべし。

こらふ　こり　こる　これ

男鹿街道三十三番の石碑

追分を一番として男鹿街道天王村までに三十三番の石碑あり。願主太田氏とあり、文化二年乙丑八月吉祥とあり、建立者は数名也。太田氏又は某

講中、某郷中などあり、何たるの願意なりや聞たし。



北野天満宮の前の池

予が幼年にて実家にありし四十年前に祭日に参詣する頃は、今の倍大いなる池なり。上出戸に行く男鹿街道の十文字の西部の南にあり、此池にて佐竹家先代鳥を打て社殿を建設したりというのと古きものに見ゆ。

其后予が実家奈良の先代子なきを祈りて設けたるはたしに新築せしは今の宮也。其時宮の四隅力士を刻み損じたるは予が祖父喜市郎翁の幼年の時にて、座布の縁の下にありたりと語られたり（これは今の茂氏の家也）。今の茂（奈良）氏の家も其大工の建たる家也。

出戸の茶屋の老父の呪語

予幼年の頃は上出戸の前の池の側（男鹿街道の傍）に茶屋あり（其外に追分より天王まで茶屋なし、四十年前）。此茶屋の老父は呪が上手なりとて諸々に頼まれ（其頃七八十の人也）行く。ある人其呪語を密に聞きしに、「金易右エ門しつかと守れ」といふ外何もなし。

今思うに例の秋田蚕業の開祖金易右エ門の事也。其当時同氏が人の為に尽力せられたること、下民に至るまでよく身にしみ込み、此金氏に守りを祈られたる民心思い量られて感心せらる。（今日男鹿街道を過ぎ彼の茶屋を見て思い出して記しぬ）

岩倉毘沙門亡魂施餓鬼

旧七月廿日施行（佐藤政治氏の過去帳前文を写）。抑岩倉毘沙門の名称たるや、其昔各純然たる一村落也。其廃村の起因を尋ぬるに年代不詳にして判明ならずといえども口碑に伝ふる処によれば、此大倉村の山野は往古の大倉字の地のみなるを、當時の肝煎喜右エ門なる者右二ヶ村の廃滅を斗り其土地を奪わんとして大倉の附属地たらんことを企てしに果せる哉終に両村廃亡の悲境に陥り、

其亡村の人民天に歎き地に哭し、仮令身は死すともいかで此恨を忘るべき後年必ず報をなさんと相呼び相叫で哭泣せりと。当時の惨状押はかられて哀也。

叔此喜右衛門なるものは大倉の為利益を斗りしも、岩倉毘沙門の為恨みの種をのこせしこそ是非なけれ。此こと曾祖父八右衛門幼年中老人の咄にて耳にし、後人となりて右二ヶ村の再興を企て両村の祖霊を弔祭し以て亡魂を慰めんと深く此道に心を悩ますといえども、当時岩倉山は御札山とて官有の山林なれば厳制ありて率爾にはからいがたく、且村方も共同の念薄ければ弥々心を苦しめ時の至るを期しけるに、惜哉ふと病の床に臥し終に黄泉の客となりたるは遺憾なりき。

其子即ち祖父八右エ門にして、親の意を継ぎ一意専心再興の計画に他念なかりしも又果さずして没す。三代目即ち予が父八右エ門（幼名金治）曾祖父及祖父の志願果さざるを深慨しいかにもして父祖の志を継ぎ再興の効を奏せんと日夜苦心百折千磨此道に従事する年あり。一念満れば何事かならざらんと、宜なる哉文久三亥年を期し竹材植立の故を以て官に出願、許容せられて岩倉の総山村方に下賜せらる。之れ再興の端緒たり。

尋て右地を家別配分となし、以て竹材の栽植に従事すと同時に素の村落に復して亡魂を慰めんと、彼の地に人を引越さしめ田畑栽植の便を説き、子孫繁栄の福利疑なきを諭せしに、村内有志吉田佐治右エ門をはじめとし佐藤八之丞、渡辺小三郎、大淵平治、吉田助右衛門、吉田文四郎の諸氏続々居を移しぬ。其費悉く父八右衛門の自弁たり。

現今毘沙門とも合せて二拾余戸の多きに至り一小部落の形をなして一挙兩得、亡村の再興と共に竹林の盛大を見るに至りたるは全く祖父等力らの添へたる結果にして、決して偶然の事にはあらざる也。亡村再興の宿縁それ此の如し。

茲に於て予亡魂弔祭の道を講ずるも如何せん。名跡の絶えてあらざれば其本源を探ぐるの道を失い苦心蕉思すること多年。于時明治三十一年七月十六日師石川理紀之助翁に随い潟西村（部落名鶴木、角間崎、松木沢、本内、福米沢、野石の六ヶ処）適産調出張中実地監査の序石川翁と共に永源寺に至り古物の有無を尋ぬるに、現住職高垣天恵和尚過去帳の外古きものなしという。然らば其過去帳にても見まほしと一覽乞いしに和尚諾して之を持来り、予之を閲するに曾て廃亡せる岩倉、

毘沙門沢の両村に関する法名の多ければ心魂天外飛散の思いをなして請うに騰写の故を以てす。和尚速に諾して予に与う。之れ亡村再興と共に祖霊弔祭の端緒を開きたるはじめ也。

茲に於て予二通を写せり。一は以て菩提処大龍寺に備え、一は以て岩倉一小部落祖霊講に備う。岩倉居住の人民にして弩々此亡霊弔祭の道におこたるべからず。若し後年に至り此念忘却するに於ては必ず子孫滅亡を招くの恐れあり、深く慎み厚く信じて疑うべからず。聊か其事跡を掲げて後日の参照にしるしぬ。

因にいう、本書は甚だふるびたれば美濃紙もて裏を打、更に表装して箱に入れ以て永源禅寺に返還せり。かしこ。

于時明治三十一年戊戌八月一日
南秋田郡脇本村富永十六番地元大倉

佐藤 政治

旧七月十九日の夜岩倉不動社に於て祖霊講の永続法を協議す。

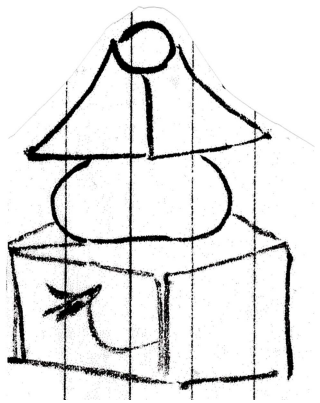
岩倉右近の館

今の岩倉の西部の堆に一本木の台という処にむ

かし岩倉右近という人の居館のあとあり。この地をふるくは元岩倉と唱う。今存せる八房梅は岩倉村肝煎菅原庄左エ門屋敷也。大春日の社も同家の氏神なりしという。梅は庭木なりという。今小き池ありこれは元の屋布あとにて、池の中に古井の跡あり。其子孫処々に移住して今は大倉の村にあり菅原与助という。此肝煎は昔し元岩倉より引移りたりという。

元岩倉の地 同寺の古墓

今の梅の沢に入る墓地に如斯碑二基あり。(処々に散らけてみゆ、取集めおくべし)此古碑は湯の出の沢より出たりという。此と同様に柱板の如きもの出でたり、寺あとなりという。口碑あり且此寺に真言の名高き行者ありしともいう。此柱根の木もて今の木像を刻みたりという。



新嘗祭 豊明節会 神嘗祭 大嘗祭

作法類語集に古くより十一月中の卯日に行せ玉える神事にて、今年の初穂を神に奉らせ玉う也。さて天皇御一代に一度行わせらるゝを大嘗祭といい、年毎のをば新嘗祭と申す。其翌日行はせらるゝ公事に豊明節会とて、昨日新穀を神に奉らせ玉いて、今日天皇もきこしめさせられ臣下にも玉う也。今の大御代に至りても十月十七日に行わせらるゝを神嘗祭、十一月廿三日のを新嘗祭とて其のかたを絶せ給わず、いとおごそかに行わせ玉えり。

石灰華

鹿角郡小坂より出る処の石灰岩（化石）を鴨下技師は石灰華と申せしよし。（高田真成氏）

黒曜石

舟越より脇本の間に黒曜石の小石多し。これらもと飛嶋より流れ寄りたるものならんと思う也。飛嶋には黒曜石の一の山ありということ東條平二郎氏の申されたり。脇本段の越より地獄谷地までは古く海岸なれば、此海辺に寄りたる物なるべし。此辺より石器時代に各地へ材料石として持運

びしならんか。

岩倉祖霊をまつることば

人はいかにおもうらん、予は世にうらみなき斗心易きはなきぞかし。此富水の里宇岩倉はむかし岩倉右近の君の住給える里にして、其館のなくなりし後も久しく今の一本木の台のほとりに家並多かりしを、田畑を作る便より終に山の麓に移りしとなん。されば今を去る二百年のむかし大倉の為にあまたの山林耕地を失いて終に亡村となり、其恨みを子孫に報んと叫びしなど口碑に残れり。

このこと佐藤氏三代のむかしより再興の志厚かりしも、時いたらずして之果さず。今の佐藤八右衛門翁が竹林をやしなひ国に新なる産を開かんことを企て、一たび官有となりし地を取戻せしはじめにて、今や二十余戸の村居をなせり。されど亡村となりし昔はいかなる人々が住けん、いかなる処々にか家居はありけん、正しく知るに由なかりき。さるをこたび適産調の序昔此里の菩提所田谷沢桂源寺の古書を伝へ秘置たる鵜木の永源寺にて古き過去帳をもとめ、岩倉毘沙門の村は更也其名さえ定かならざりし水沢てう里のありし

をはじめ又其住人の名、其法名、年月等まであまた知ることとはなりぬ。

岩倉の岩に刻めるものさえ年ふればさだかならぬを、誰守るといふこともなき紙屋川の薄き紙にかきながされし一卷が二百年余りの今に残りて埋れたるが世にあらわるゝは恨みし魂の消のこりたる証なりけり。佐藤八右衛門翁年あまた力を尽されたるいさお、其子佐藤政治君が手に此一卷をさぐり出せるは其結果をなせりといふべし。おもえば人の力のみにはあらざりけり。

今日はあまた法の師を招き、年久しく埋れたる亡魂を祭り将祖霊講を結び、其資本さえ設けると斗られ幾千年の行先も心易きをおぼゆ。亡魂も今更何の恨かあらん、魂もつどいてともに嬉しきをかたり給うらんかし。

叫びたる恨はきえてなかなかに此里ながく魂や守らん

こは今日御魂まつれる此里人が八房の梅の花びらの如打集りたるしりへにつらなりて

石川理紀之助しるす。

明治三十一年旧七月七日寒風の嶺おろし袂涼しく吹そめたるに、村雨の雲と共に恨は晴、寒風の

山の嶺高くなる神のとゞろく音と共にながく世につたえんとてなん。

増川山の杉種

吉田権助氏云、男鹿増川山は栗杉の大樹ありし処也。近年郷林を伐採したり。杉は自生の芽生なりという。或は切り口より数本芽の出るあり、又は三四尺も一間も放れて根より芽の出るもありという。故に種子は甚稀にして得がたき程なりという。俗にいうさか杉ならんか。

昔桂樹の多きこと

今も稀にみゆ。予が二十才位の頃の極旧家といわるゝ農家又は宮寺（大凡今より二百年頃の建築）の大材は大方桂なり。太平山などより多く出たりという。ひとり太平のみならず山には桂の大樹ありしものと覚ゆ。近年かゝる大樹の桂はみることなし。土地に叶いて自然大材の多かりしをおもえば、該樹などは将来森林などの養成に注意すべき也。予の知りたるは

下虻川東伝寺の厨の用材

北川尻の伊藤六兵衛の用材 此家昨年売却。

処々に要めたるものあり。昨日も舟越の大野金之助氏の跡台は同家の平ら物にてちような打の三四間のもの見たりし。

川村永之助氏への悔状 姑のなくなりしとき

尊君は御家政をおもえば非常の長命を望まざるべからずとは常に申され候よし。小子は此事を承る度に相嘆き居申候。老幼不定とは幾千年の昔より申事にて、今更悟るも悟らぬも申までも無之事に候。長命せねばならぬとの御心配は長命ならぬしるしに御座候。

義経時代より五百余年長命したる残夢無々はいかゞ申され候哉。又長命は年数に拘わり不申候。今晚死するも長命百千年の寿を保も短命に御座候。若きも頼みにならぬは御不幸にて相分候。老は勿論唯一家の長く保は枝直大人の一首に止り申候。

我家の栄ねがはゞ人の為よからんことの数をつくせよ

これにてことすみ、あとは実行のみに御座候。世の中は何の苦もなき事に御座候。今善人のあとの亡びたるを見てまよう人は草木の栄枯をしらぬと同じことに御座候。生ずる春、栄ゆる夏、枯

るゝ秋、一草一木さえのがれがたし。これは生あるもの、なきもの常に御座候。種のなくならぬが生あるものゝ楽しみならずや。乍失敬此場合御悟あらば誠に御一家の為に御安心長命の御望も可達候。小子此頃は一物も財産なけれども乏しともおもわず、利用すべき廢物もなければ無宝長者と自称致候。小子は焔て又おもしろき境界に相成申候。尊君も不幸にして安心の境界に入玉わば幸甚。無宝長者の供物として此手紙にて御悔申上候。かしこ。

若しとてたのみにならぬよの中をさとの種になすよしもかな

川尻 川村君 御悔

五時庵主

佐藤信学氏のこと

佐藤信学氏は我学友也。としは我より老たること父母の如し。秋田町保戸野諏訪町に住み、佐竹家の元御小人小頭也。常に酒を好み和歌を生涯の慰みとせり。勤中四十幾度江戸に登りたる人也。當時は江戸まで廿日旅也。慾少く家甚だ貧也。黒川春村の弟子也。春村に随うこと四十余年、翁大に愛されたりという。故に語学に委しかりし也。

余ら折々不審あるを問いて教をうけし也。

氏のよめるうたに

夜をしばし松にのこしてあらし山あけゆくかた
はさくらなりけり

明治廿年死す。全良寺に葬る。

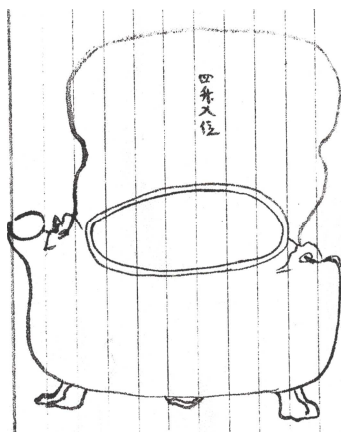
牛丸重令氏

同氏は秋田藩士にして山の手に住めり。后中谷
地町又は荒川鉾山に住せり。これも酒をこのめり。
生涯歌を以て樂とせり。

焼面

滝などある処の樹陰の岩苔に生ずる草也。是を
山本郡に岩ぶきというよし。

舟橋の古茶釜 沢畑粕治にある古茶釜の図



靈飯（にたまめし）

予が家例として、小正月十五日晚簀に一紙を布
き七八寸の回りにして白飯の握り飯を作り。平年
は十二、閏月あれば十三をならべて一つ毎に箸二
本づゝを指立て山椒の皮ふくのりを添て奥の間
に置くをにたまめしという。

二十日にはこれを下して玉子を包みたる如くに
てわらにて包み、干して夏中食する也。こは靈飯
の訛りたるなるべし。靈飯の事真澄翁の書留に見
ゆ。

あまいけ（雨池）

愚考 土地の名にあまいけといふ処あまたあり。
是は人力にはあらで雨水にて池になりたる処を
いうならんか。

沢見

愚考 これも土地の名に多し。地勢より考うれ
ば沢間の正面の筋に多し。沢上を見るという意な
るべし。

ひるね

これもあまたある地名なり。昼寝の事にはあらずして、古にいいなれたる別事なるべし、可考。

才の浜

下刈村の内にして岩瀬の方に向たる山崎にあり。此名称、地勢より考れば古海浜なりし時、氷海の解て氷山（さい）を積みたる処にて、氷山の浜というならずや。

行塚

小泉村の西北にあたり、下刈山境に接したる処也。爰は予が若年の頃は人家なく、小山なりき。

行塚という故行人の昔し居りし処にや。今より二十七八年前（明治三、四年の頃）、小泉の豪農奈良喜兵衛隠居して如水といい。此山際の潟岸の谷地を村中より譲受け屋布を盛り、家屋を設けしは始にて。今は道路の南北とも十戸あり。北の方に妙見堂あり、これも近年の建立也。

奈良権三郎等法華宗を信仰して、佐竹壺岐守の旧館地椿台（川辺郡）にありし妙見が久保田伝法寺にあるを引受てこゝに祠を建たり。

因に云、此頃甲州より来たる僧にて日教という

者妻を連れ、妻は武州二股川の和田某の娘也。修行中此妙見堂に止り経石を書き、小泉と鳩崎との境なる地藏長根の下に湊道と鳩崎道の角に埋めたりしが、此地に埋置がたき事ありて我養父長十郎これを引受て今に山田の墓地花畠に埋め、日教の建たる石と嗽盥と在り。

此日教独り出立行衛不明。妻止り名をキヨといふ。此者行塚に在る北秋田郡上杉より移りたる大庭某といふ医者の後妻となれり。大庭はなくなりたれど、キヨは今に存在なり。六十余才也。（明治三十二年記）

小泉の産土神

素と三軒町の小山の上にありし神明社が産土神なりしとかきく。後小泉の南端鳩崎の方の樋の口の下苗代（庚申塚ありて古き榎ある後なる）より掘取りし石にて、これを神体として八幡社を鎮守神とせしといふ。予が若年、四十年前までは祭日は九月十五日也。其后四月十五日に替たり。

本の宮 古き社あり。

海老穴といふ処の西部の山岸に石器の欠け処々にみゆ。

小泉の石器

潟向細首橋を渡り正面の砂山の上層に石器類多し。夫より道をへだて北部には最多し。矢の根石、剣瓶、雷斧等完全したるもの実家に掘得たるあり。

あいの橋

細首といいて男潟、女潟の合にかけたるを合いの橋という。古き曰挽唄に

小泉の女潟男潟の合いの橋、渡るながらも恐ろしや

もと大きな橋にや。今はさゝやかなる土橋也。

千人隠

下刈の古跡に千人隠という処あり。砂吹穴なり。古戦場なるべし。其年代知る人なし。

石田梅巖

弘道叢誌八十一号に梅巖（心学道話の開祖）中略、行藤氏の間に「先生妻子なきは如何なることぞ」。先生答曰「吾れ道を弘むる志あり、然れば妻子にひかれ大道を失わんことを恐れ独身に居れり」。梅巖とは石田勘平翁の事ならんか。

別分のはたらき

某の父に分り申候という処へ、別り申候とあり、是誤也。

分りは 行四段にして、「り」は二の音より受くる例なれば正しき也。

別りは 行下二段にて、「り」という事なし。申候というには「れ」より受くる例也。

中古までの大工

二百年近きまでは家作の大工は飛驒の国に出て業を修め、これが棟梁となりてあまた弟子を連れて細工に回りしものなりという。北秋田郡笹館村野呂太一郎氏の三四代前の人も大工の棟梁にしてありしよし。夫等の巧者なる人の建たる家を、今も飛驒の工の作なりなどいい伝えり。

古き家の大黒柱など用いしは、多く此時代のものならん。旧藩にも作事方に御大工棟梁などいいう係りありし也。其名残にや。（近くは北野宮出戸、小泉の奈良茂の家なども是等の作なるべし、同じ大工なるよし）

何めり

大かた「なり」とよむに似ていさゝかつかうべし。なりはちかく見きくことをさだかによむ詞なり。「めり」はそのおおむねをおしはかりてつかねいうこゝろあり。里に「おもむきぢや」、「様にぢや」などいうに似たり。心えやすからぬ詞也。

乱橋

金足村の内八丁目の隣にて、大久保との間にあり。此名称は弥陀の橋なるよし口碑にあり。古は阿弥陀如来ありて、そこに橋ありしよし。今の庵室の辺ならんか。

机の事

予本年に至り五十回の冬、巡回中各地にて机を借りて用いみるに、老後手冷て堪がたきものあり。第一冷けきは塗たる机。次は堅木の机（けやきなど）等也。冷やかならずとしてよろしきは桐也。次は杉也。又肩もはらず、眼の為にもよき也。堅木は肩はりてよろしからず。

瀬沢の槻

夜叉袋村の内瀬沢一番地渡部栄四郎道傍にある

槻にして、二丈五尺回り、中に空なく樹勢よき木という。今年此樹を伐りたり。三十二年

餓死

人累日絶食饑困て死とするは、先飯を与へ喫すべからず。若喫すれば立処に死す。且妄に服薬を用べからず。療法、手拭様の物を熱湯に浸し臍腹を熨ば自然と回生るべし。其時白湯の中へ味噌汁又は米飲少しを冲て攪延しめ腸をうるおし、其後に能く煮たる薄き粥を食せて。両三日の間に段々其粥を濃くして食わせ、数日の後に軟かなる飯を与え食せてよし。

凡飢人白菓を食しむれば死す、慎べし。往年或国凶作にて、饑人杖にすがりて男女老幼数人街頭に徘徊して、後には飢つかれ、或は倒れ、或は匍匐徒に呼吸あるまでなりしを。行客中富商など見るに忍ず、食物を与るに食物は大抵握飯也し。其飯を食たる人食し終ると頓に故死、或は未半も食せず手に持ちながら死せしと也。是其与る人々右の法を知らざる故也。惜べく哀むべきの至りならずや。慈仁の心あれども其術を知らざれば、おもわず人を害する事あり。茲に記して後人の鑑戒と

す。

教の言葉

佐藤初太郎氏画の師匠の教の言葉なりという。

心に密にして、筆に粗なり

一木一石

此心は常に怠らず、心に密にするとは能く心に其画に練り注意して、筆を取るときは指支なき様にすべし。又一時に数百の紙を書かずとも、毎日一木一石を怠らず学ぶべしとの事なりという。何れの学びも皆同事也。

石敢当

琉球にも多し。九州の南部にあり。家居ある処のつき当り、即街路の丁字若は矩形をなす処に在り。目的は全く魔鬼を駆逐、厭圧するに在り。

秋田には保戸野、川辺郡桜村横森、秋田馬喰町。

秋田感恩講

文政十一年に創立す。那波三郎右エ門祐生発起。六十余歳異動なくして各郡にある感恩講十五。是迄救恤したる三百三十余万人。講則大要あり。

うなづく

藤原実行、藤原長実と躬恒貫之のまさりおどりを論じて俊頼にといしに、俊頼打うなづきて躬恒をかるがろしく思い給うなといわれければ、愚考少しそりて思案顔になるをいうなるべし。

うなじは項うなじ（説文、頭の後也）。秋田の方言「とうのくぼ」なまりて「とうのこぼ」という。頭のくぼ凹なるべし。此項うなじをつくことならん。

されど点頭うなづく、頷うなづく（僧天音釈、低頭也）、低首うなだるとあれば、首をたるゝこという也。前にたるゝことにあらざるべし。又ぬかづくといえは稽首ぬかづく（周礼九拜の初拜也、謂屈首至地也）、稽顙ぬかづく（文選）、頓首ぬかづく（叩頭、叩首並に全を出上）。

又愚考、額ぬかといふ、額ひたい、顙ひたい、題ひたい（文選註、額也）。

ぬかづくとは額ぬかを突くことにて、神仏などを拝

することにいふ也。うなづくというは項を頭の後
に付ることにて、そりかたむくことなるべし。

田螺を囲うこと

田にしを冬食する為に水に多く入れ置けば腐る
也。畑に囲うべし。先田より採り来たるを一日囲
うべき畑地に置き這わしむべし。而して土を掛く
れば腐ることなし。しかせざれば逆になり、又は
密着等をなして害う也と。(伊藤甚一試)

一里塚

大久保には さいかち 鎌田善兵エと智ほう院
の前にあり。今の高橋正の家。

飯塚には 榎 飯塚の産土の下の通より本村
に曲る角にあり。

追分には 榎 追分、三井甚吉の北角。

矢橋は 縄手にして川尻道より 丁にあり。

大清水は 櫛 大清水の村より本道に出る道
の南 丁にあり。